

兵庫 県 医 師 会 報
平成十二年二月号より抜刷

随筆

三十三年ぶりの邂逅

かいこう

上 塚

弘
(芦屋市)

随筆

三十三年ぶりの邂逅かいこう

上塚 弘

昭和四十二年（一九六七年）八月三十一日、午後二時二十分にトス・アップされた。西日本医学生体育大会バスケットボール決勝戦は、めずらしく大勢の人が観戦に来ていた。地元長崎大学医学部が決勝に進出するとあって、応援に駆け付けたO・Bや学生、他大学の学生達は、どこが奈良医大の連勝記録を止めるのか、きつと長崎ならこの記録に終止符を打つのではないかと、期待と多少の野次馬的な気分での観戦である。

当時の奈良医大は本当に強かった。前年度から医学部、薬学部相手では負け知らず、関西学生リーグに加盟しても、関西学院大学と京都大学に負けた以外は、五部とはいえ九連勝をし、入れ替え戦も勝ち、破竹の勢いであった。

この大会も、決勝まで相手をまったく問題にせず、ダブル・スコア以上の差を付けて勝ちあがってきた。

一方、長崎も強力なチームで、国体の県代表選手や実業団チームと互角に戦って、この大会に臨んできた。

この二年前の昭和四十年に、長崎にあつという間もなく一敗地に塗れた。後日聞くとところに抛ると、当日長崎は敗戦覚悟、荷物をまとめ、水盃を交わしての出陣だったそうだ。敗因は色々あろうが、完敗も完敗、大完敗であった。見事な一回戦負けを喫した。この敗戦を機に猛烈な練習をした。そのエネルギーを勉強の方に向けていたら、もっと違った人生が歩めたのにと思われるほど、寸暇を惜しんで練習をした。翌年四十一年京都であった大会は、長崎と優勝を争い、前年の雪辱を遂げることが出来た。この時点で一勝一敗であるから、雌雄を決すると思うのが両校に漲っていた。

昭和四十二年の試合は、今思い出しても胸が締め付けられるような壮絶な試合であった。突放しても、追い付かれ、逆転され、今度は追い掛け、追い付き、やっと逃げ切るひとつのミスをも許されない、息詰まる展開であった。幸いにして勝てた。医学部相手だけではなく、学生連盟に入って強豪相手に戦ってきた試合経験の差だけが、勝敗を分けたと思っっている。

時は移ろい、平成十二年九月二十三日、実に

三十三年振りに当時のメンバーが一同に会し再び試合をやるとうことで、長崎へ乗り込んだ。長崎の方は相当な量の練習を積んできたらしく、走力・跳躍力も我々より勝っていた。今度は完敗であった。楽しい汗を流した後は、試合を手伝ってくれた学生諸君と昼食を共にすることになった。シュートが入った本数によって、この昼食代を賭けようと挑戦された。なんと小生が放り投げたロングシュートが勝敗を決し、名物の中華料理を鱈腹食べられた。流石は転んでもただでは起きない、大阪商人の末裔だけのことはある。

午後のひとときは長崎を案内して戴いた。安政四年（一八五七年）オランダ海軍軍医ポンペ・ファン・メーデルフォルトにより開設された、医学伝習所を源流とする長崎大学医学部は、わが国最古の医学部で、小高い丘に、大きな樹木で囲まれた学舎、レリーフと共に掲げているポンペの言葉

「医師は自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものではなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶがよい」

歴史がいつぱい詰まった医学部を案内して戴

いた先生方には、羨ましい思いもした。

原爆で上半分がふっとび、傾いた台座が今尚残っている、当時の正門跡へと案内された。その台座には大理石に以下のような文章が記されてあった。

Here is Preserved the Entrance-Gate of the former Nagasaki Medical University. As it was just after the explosion of the Atomic Bomb, the second one in history, which instantaneously carried off the lives of our dear Professors and Friends, numbering over 850.

The lamentable event occurred two minutes past eleven o'clock on a fine morning of August 9th 1945 (20th yeay of Showa Era).

"... carried off the lives of our dear Professors and Friends ..."

この表現になにかすべての怒りが込められているように思えた。

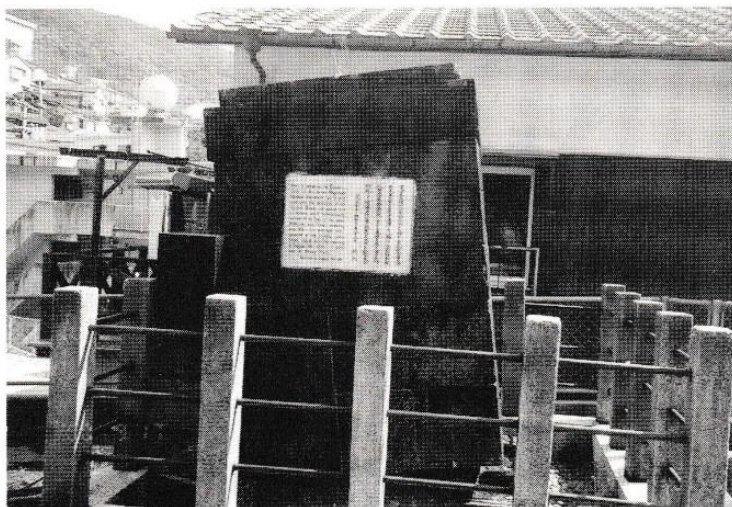
「永井隆先生ご存じですね」と問われた。

高校の修学旅行の折、バスガイドさんが熱唱していた「長崎の鐘」、学童の読書感想のベストセラーであることを思い出し「ええ」と答えると「あの永井先生が長崎のバスケットボール

を創ったんですよ」と自宅であった如己堂、永井隆記念館に案内された。

「己れの如く他人を愛す」という先生の信条から名付けられた、二畳ひと間きりの小さな自宅は、先生が今もなお床に臥せながらも、懸命に生きておられるかのように思えるほど静謐に保存してあった。

先生は明治四十一年（一九〇八年）松江で生を受け、松江中学、松江高校を経て、昭和三年長崎医大に進まれた。



ふっとび傾いた正門

すぐにバスケットボール部を創られた。コートは屋外であるから土を積んで固めて造る作業から始まった。どの土をどれだけの分量混ぜ合わせるか、どれだけの厚さを積み重ねるか、このようなことを何度も推考され、硬く、水捌けがよいコートを造られた。

因みにバスケットボールは一八九一年（明治二十八年）アメリカ・マサチューセッツ州のスプリングフィールドのYMCAで考案され、我が国では大正年間から本格的な競技となったことからみても、人並みはずれたエネルギーの持ち主であった。

先生は、巧いというより強い選手であったと聞く。特にファイト溢れるディフェンスは強く、マークされるとなかなか攻めることが出来ず、今でいう攻撃的な守りの達人であった。また、熱心にこのスポーツに取り組まれ、メモ魔であった先生は斬新的なフォーメーションも考えだされたりして、ついに昭和六年（一九三一年）全国選手権大会で三位にいられた。まさに快挙である。

先生は、スポーツだけではなく、勉学に於いても大変秀でた学生であり、まさに文武両道を行く俊才で、首席で大学を卒業された。

しかし稚気な面もあり、酒に酔っ払って雨中

寝入ってしまった、中耳炎に罹られそのため難聴があった(のちに治癒)。このため内科学志望から放射線学へと変わられたようだ。不幸にして治療と研究に使っていた、放射線装置から過量の放射線に暴露されたのであろう、昭和二十年六月に「慢性骨髓性白血病」と診断された。なんとその時の白血球は十万を越えていた。

八月九日原爆に被爆、自身は重傷を負うも、不眠不休で救護活動に当たられた。

その後の先生の闘病生活は鬼気迫るものがあった。この病気の性格上寛解・悪化の繰り返しであったであろうが、医学者としては昭和二十一年長崎大の教授に就任、指導教官として後進の指導に当たられる傍ら、作家としても数々の心打つ名著を上梓された。

すさまじいばかりの人間愛に基づく、被爆体験を通じての平和への渴望は世の人の共感を呼び、今尚不朽の名作として多くの人に読まれている。

白血病の診断が下されてから、昭和二十六年五月一日、大木が倒れるが如くに亡くなられるまでの六年間はまさに死を賭けての、あらゆる限りの力を振り絞っての闘いであったのである。当時の治療学からすれば、とうていおおよびもつかぬほどの生命力である。病気との闘いで

は勝者であったに違いない。

永井隆先生のような偉大なる先人が、バスケットの達人であったとは中学校以来の今も尚「ヘタの横好き」で、バスケットに夢中になっている凡人にとつてすうーと胸のつかえがとれたような、なんだか痛快な気分になっている今日である。

永井先生の書かれた多くの書物は、含む所があり長い問欧米諸国で翻訳されることは無かつたと聞く、アメリカにとつてカソリックの教会である浦上天主堂を爆破し、焼けただれた亡骸と青いロザリオによつてのみ妻であることを識別した作者の文など、いくら誤った所への原爆の投下とはいえ、ばつが悪くて、それこそ穴があつたら入りたい心境であつた所以であろう。

永井先生の発病当時から、亡くなられるまで主治医として献身的な治療に当たられた当時の内科学教授朝長正允先生のご子息は、現在長崎大学医学部原研内科教授で付属病院副院長の朝長万左男先生である。万左男先生も昭和四十二年戦った時の長崎の名ガードであつた。今回の遠征にも一方ならぬお世話を戴いた。

バスケットやってる人も、えらい人いませ!
《昔屋市》